

## 国内経済情勢

### 概観

金融引締めは、経済実体面にも徐々に浸透してきたが、その影響はなお区々であり、経済活動には依然根強い動きを示すものも少なくない。すなわち、一流企業ないし好況業種の手元は多少の圧縮をみたにせよ、なお総じて余裕含みであるほか、最終需要の堅調もあって、生産の基調は根強い増勢を続けている。また商況、物価面では区々の動きのなかに、総じて下げ渋りないし底固めの気配がうかがわれる。

この間、貿易収支は、輸出の好調に輸入の落着きも加わって、改善の度を強め、久方ぶりに黒字となった。しかし輸入の先行指標には、このところ再び動意がみられ、これは叙上の経済活動の根強さを背景とするだけに注目を要するところと思われる。

#### 金融市場はかなり引き締まるも、企業金融はなお総じて余裕含み

7月の金融市場は、通月引き締まりのうちに推移した。これは主として6月賞与関係の源泉所得税移納など、財政資金の引揚超過がかなりの額に達したためで、この間約600億円に上る本行の債券買入れが行なわれたが、本行貸出は月中161億円の増加をみ、コール市場も一段と堅調となった。

7月の全国銀行貸出増加額は1,973億円と、著増をみた前年同月を2割方下回った。当月の資金需要は、賞与資金、輸出買手、輸入はね返り資金および地方公共団体関係資金などがかさんだほか、5～6月ころから繰り延べられてきたものもあって、総じて根強さがうかがわれた。このため銀行筋では、選別を一段と強化するとともに、手

元に余裕のある大企業向けの増加運転資金貸出の削減ないし繰延べなどにより、貸出の圧縮をはかった模様である。

こうした事情からみて、金融引き締めは企業金融面にも漸次波及しつつあるものと思われる。ただひっ迫が著しいのは、主として業況不ぞえの企業においてであって、目下の根強い生産動向をささえている一流企業や好況業種では、手元現・預金が多少取りくずされたにせよ、現在なお高水準を維持しているものがあることは否定できない。

なお、7月中の不渡り、倒産は前月に引き続き総じて落ち着いていたが、8月にはいって再び増加した。これには、前述のごとき企業金融の引き締め傾向が背景にあることは否めないが、基本的には既往の業績不振や放漫経営によるものであることは従来と変わりない。

#### 生産の実勢は引き続き根強い増勢

7月の鉱工業生産(季節調整済み)は、速報で前月に比べ-0.2%の微減となった。その内容をみると、輸送機械が自動車業界の夏季休暇繰上げにより大幅に減少したほか、耐久消費財も、軽四輪車、電気冷蔵庫、カメラなどを中心にかなり低下したが、反面、非耐久消費財、生産財はいずれも引き続き増加を示している。輸送機械を除いてみると、当月の生産実勢は前月比+0.7%と依然根強い増勢を続けている。

鉱工業出荷(季節調整済み)は、7月中-1.3%となった。これは資本財が前記の事情に基づく自動車を主因に減少をみ、また耐久消費財が電気冷蔵庫、カメラなどの需要一巡もあって著減を示したのが主因である。

7月のメーカー製品在庫(季節調整済み)は、前月比+0.2%と微増した。これは、主として耐久消費財の大幅増加によるもので、生産財は非鉄、

鉄鋼、化学製品を中心に微減となった。

最近の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財の出荷(季節調整済み)は、総じて増加傾向にあり、大型機械の減少、汎用機械の増勢鈍化がみられるものの、その他の機械類では根強い動きがうかがわれる。また、先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は月によりふれはあるが、ならしてみるとゆるやかな上昇傾向をたどっているものと見受けられる。ちなみに、企画庁の機械受注予測調査(80社、船舶を除く)によると、7～9月の受注は前期比+22.8%と堅調が見込まれており、季節性をならし、かつ引締め下における達成率の低下を考慮に入れても、若干の上昇が見込まれる。

#### 商品市況は動き区々ながら総じて下げ渋りないし底固めの気配

7月から8月前半にかけての商品市況をみると、商品によってかなり区々の動きを示しながらも、大勢としては下げ渋りないし底固めの気配をやや強めつつあるように見受けられる。

すなわち、砂糖が反落を示し、また、セメント、木材、クラフト紙などは軟調を続けたものの、非鉄、鉄鋼(条鋼類、厚板)が騰勢を持続し、化学製品、紙・パルプの大部分、重油、石炭なども引き続き強含みに推移した。これに加えて、これまで軟調をたどってきた鉄鋼薄板、繊維などの主要商品においても、いくぶん下げ渋りがうかがわれた。

こうした商品の動きには、輸出の好調、市況対策の強化、輸入原材料価格の堅調といった要因が働いているが、秋需期待感がある程度影響していることも見のがしえない。しかし引締め浸透、供給力の増大といった事情からみると、これが直ちに本格的な底固めないし反騰へとつながっていくかどうかは軽々に判断しえない。

7月の本行卸売物価は、食料、繊維、セメントが軟化したものの、鉄鋼、非鉄、石油、石炭の値上がりを主因に前月比+0.1%と久方ぶりに反騰を示し、8月上旬も反騰後の水準で保合いとなっ

た。

一方7月の消費者物価(東京)は、前月比-0.1%と5ヵ月ぶりに反落した。これは、主として野菜の大幅下落によるものであり、季節商品を除いてみると+0.1%の上昇と、引き続き根強い動きを示している。

#### 貿易収支の改善は進むも、輸入の先行きに動意

7月の外国為替収支は、総合で22百万ドルの赤字となった。これは、輸出の好調による貿易収支の大幅な黒字から、経常収支がほぼ均衡したものの、資本収支が短期資本の大幅流出増を主因に逆調となったためである。

7月の輸出は、前年同月に比し、為替で+26%、通関でも+33%と好調な伸びを示し、4～6月に比べてみても増勢を一段と強めた。商品別の動きを通関で見ると、船舶、鉄鋼、自動車、合繊などが引き続き好調であるのに加え、魚介、人絹糸、繊維2次製品、ミシンのように、従来かなり停滞ぎみであった商品にも、このところ持ち直し傾向が見受けられる。また、先行指標でも、輸出信用状は前年同月を3割方上回る伸びを示している。ただ、これには、英国向け鮭鱒缶詰の成約繰上げなど若干の特殊事情が響いている。

7月の輸入は、為替、通関とも前年同月比+11%と高水準のうちにも4～6月に引き続き比較的落ち着いた動きを示した。通関の実勢で見ると、これは、原燃料が金属原料、石油などを中心に総じて高水準を持続した反面、食料が高値粗糖の入着、内麦不作による小麦輸入の増加といった、これまでの特殊要因の剝落から、4～6月に比べかなり減少したためである。

しかしながら、輸入信用状などの先行指標は、季節性を除いてみると、4～5月ころをボトムとして漸増傾向を示し、7月はボトム時に比べ約1割高い水準となっている。これは、食料、機械は弱含みながら、鉄鉱石、銑鉄、非鉄、石油などの原燃料が生産の増勢を映じて、根強い動きを続けているためにほかならない。